

す。

『田舎の姉さんから、かう言つて来た。』

と夫は傍の書簡入から一通の手紙を取つて示しました。

其手紙には、涙。廻らぬ筆で、飛んでも行き度きなれど、不如意の生活の儘にならぬこと、嘸悲しく淋しく死んだであらうといふこと、種々御世話になつて濟まぬとの事などをしどろもどろに書き塗つてあつたが、その拙い、意味も充分に通らぬのが、更に私の傷を搔き撈りましたので、その一人の姉の悲哀を想像せずには居られません。

『姉といふ人にお逢ひになつたことは無いのでせう。』

『無い。』

『嘸悲しがつて居るでせうね。』

夫はこれには答へずに、黙つて少時物を思つて居る様子でしたが、急に、改まつて、

『お前には、實に濟まぬ、……皆な、私が悪いから起つたのだ、けれどこれは許して呉れ……それに、佛が死ぬまでお前に介抱して貰つたのを喜んで、妹にして呉れと言つて居たが、これも其の願を聞き届けて遣つて呉れ……』堪らぬやうに聲を曇らして、『あれは、前からお前に逢ひ度い、逢ひ度いと云つて居つてな、何うか奥様に逢はせて……と幾度となく私に迫つたのだ。私も随分、色々、悲しい目に

も出逢つたが、今度ほど心から動かされたことは無い。實際、可哀想な娘だ。あの若さで、……あのやさしさで。』

『本當に……。』

『妹にして遣つて呉れ。』

『それは、もう……。』

私は悲哀が込み上げて、後を言ふことが出来ませんでした。で、二人相對したまゝ、深い沈黙の境に沈みました。机の上にひろけられたのは金縁の、なめし革の、レナウの詩集。私は幾度かその詩のことを胸に思ひまして、丸で一篇の詩を繙いたやうな氣がするといふことを夫に語らうと致しましたけれど、しかもそれを敢てするに忍びませんでした。

この一室の深い悲愁！ これは逝く春の恨で御座いませう。

その翌年の春で御座います、お園の臨終まで心に懸けた、お貞と申す名張少女の出で参りましたのは。同じやうに美しい、やさしい娘で、其の言葉は國訛の、丸でお園と話を爲て居るやうな心地が致しましたが、お園の臨終の一伍一什を聞いて、何んなに少女は泣崩折れたでせう。穉い時のことやら、別れた時のことやら、種々と物語りまして、何故其の時、知らせて戴いて出て來なかつたらうと返すくも悔むので御座いました。其翌日、私は一緒に墓参にと出懸けました。行つた見ますと、垣の扇骨木も

大分繁つて、夫の植ゑた小松と若楓とは蒼々と大層勢が好くなつて居ました。花を手向け、水を灑いで、合掌を致しましたが、娘は其前に打伏したまゝ、容易に頭を上げやうと致しません、いゝえ、種々のことを取集めて、段々堪らなくなつたと見えまして、果ては身を悶えて歎^{うら}歎るので御座います。あゝこのやさしい心、東京にも教育を受けた立派な嬢様方は澤山ありませうけれど、これ程眞情の流露する若い娘は多くはありますまい。

伊賀の國、名張の町、——このやうにやさしい娘の多い町は、何んなに平和に、何んなにすぐれた處でせうか。月の瀬の梅の溪、それに下らうとする新道からは、名張町に通ずる間道が、溪流を縫つて細くく屈曲して、言ひ知らず人の思を誘ふと、曾て夫が私に語つて聞かせて呉れましたが、その溪、その路、一生の中には是非一度參つて、名張少女の美しい故郷を見たいと思つて居ります。

(明治三十八年三月)

——花袋全集 第十四卷 終——

解 説

佐 藤 春 夫

自分は田山花袋の愛顧を受けた後輩で個人的には一面の識があるばかりである。生涯に遂に二度會つたばかりであつた。一度は改造の創刊の時赤坂の某旗亭に於てであつた。自分は初對面の挨拶に代へて拙作を彼が賞讃された事を感じると、朴訥な村夫子らしい翁は口ごもりながら自分の謝辭にかへつて當惑された様子で慚羞の色を示された。他の感謝に羞を示すのは高貴な人柄を示してあまりあるものである。自分がこの翁に對してその後久しく敬慕の情を感じたのもその幾多の著作の外にこの時のうれしい印象に負ふところが多かつた。再度の會合は婦人公論主催の座談會の席上であつたと覺えてゐる。翁はよく語りよく聽いて後、一人が差出した扇子色紙などに對して快く毫を揮はれて後、自分のためにも特に扇子を一面書いて與へられた。七言絶句を趣の多い達筆でさらりと書き上げて、親切に讀み上げて聞かして下さつた。翁の筆蹟は大學君の父君堀口長城先生が當時日本一と稱したもので、高雅洒脱な風格に富んだものである。翁が自分に與へられた扇子は今も珍藏して好記念品としてゐる。

自分がこの篇の解説の筆を執る事を求められた時、喜んでこれを諾したのは、これらの好因縁を喜ぶ個人的理由と、もう一つはその自然主義運動前の諸作品を、田舎の文學少年であつた自分は、空しく名を聞いたばかりで一讀して居ないものがあつたので、この機會にこの文學史上の名作を勉強して置かうといふつもりであつた。「梅屋の梅」など「花籠」に收められた諸作と「日光」とは知つてゐるが、音に聞く「重右衛門の最期」も「野の花」も「名張少女」もさては出世作として知られた「ふる郷」さへも一讀してゐないのだから、これでは明治の文學を知つてゐるといふのも口幅つたいとかねがね自省してゐたので、この機會にこれを読みかつ解して置くのが逸すべからざる好機會であると思つたからである。

自分がこの機會を利用して讀者諸子よりも幾分早くこの書によつて讀む事の出來た各篇の著作年月や發表年月のうち明確に知ることが出来るものを先づ簡略に表のやうに記して置くと、

題名	著作年月	發表年月	初發表
ふる郷	明治三十二年七月		單行(新聲社)
憶梅記	同 三十三年三月		文藝俱樂部
野の花	同 三十四年四月		單行(新聲社)
重右衛門の最期	同 三十五年二月	同年五月	新聲社アカツキ叢書の一冊として單行

梅屋の梅	同 三十五年五月	同年八月	小天地(大阪發行の文藝雜誌)
女教師	同 三十六年二月		文藝俱樂部
山小屋	同 三十六年六月		同上
春潮	同 三十六年十一月		單行
名張少女	同 三十八年三月		文藝俱樂部

右はすべて前田晁氏の示教に負ふものである。發表年月の多くは前田氏にも即座には明瞭でないらしい。後考を待つ外あるまい。

筆者は郷里に病める老母を省みるために明日にも旅行に出なければならぬので不本意にも春潮は一讀する時間を持たないが、他の諸篇はみな楽しくこれを一讀したから、聊か解説の域を超えまた禮を失するの謗もあらうかと思ふが、文學史上の作品として忌憚のない讀後感を記して解説に代へ、初學の手引にしたい。

ふる郷は作者が少年時代の自叙傳とも見るべき一篇で、その取材と文體とから來る印象かも知れないけれど、即興詩人の影響とも摸倣とも言ふべきではなく、但一味甚相通ずるもののあるのを覺える。即興詩人と言へばその他の諸篇にも或は浴泉記、埋木などと相通ずる多くのものを見るが、或は花袋翁は當年少壯で觀潮樓主人の述作を愛讀した事があるのではあるまいか、それともこれ等もみな直接海外文

學の造詣に負ふものであらうか、識者の垂教を得たいものである。

憶梅記は主人公の境涯と性格とを剔抉しその祖母の性格亦自ら悲劇を産む因となる等の觀察、また上州地方機業地の地方色の描寫など、作者が年少既に單なる抒情的作家に非ず後年の文藝上の新思潮を以て大成する資質を證するに足る初期の雄篇である。

野の花、後年名張少女を發掘せる礦脈より産出して殉情の掬すべきもの。

重右衛門の最期、亦性格と運命とを描きて憶梅記の主人公の教養ある知識人たるに對して重右衛門は一介の野人たるを以て、憶梅記の女主人公の或は上流の令嬢或は年少才媛たるに對して本篇の少女主人公が亦可憐なる自然兒たる用意は甚だ面白いではないか。この篇に於て作者が世評の一段と高くなつたのも成程と思はれる程、作者の思想も亦一段の深さを加へ手腕の非凡をも示した。雄篇でさすがに卷中でも讀みごたへのするものであらう。

梅屋の梅、重右衛門の最期の次の作としては聊か逆戻を感じさせる作であるが、幾分すつきりとした作風になりかかつたのが、

女教師、山小屋に到つて更に一段の進境を示して、山小屋などは清楚な出來榮と暗示的に深い作意を示して、既に後年の花袋の片鱗を示して餘りあるものとなつた。

名張少女、甘いと言つてしまへばそれまでではあるが甘さも亦味であるし、作者の純粹な性情の作意に溢れて人を魅する者がある。今日から三十年以上前の作品であるといふ一事を念頭に置いて讀む必要もあらう。

これを要するに、さまざまな境遇の少女と、藝術に熱情を捧げた青年との戀愛問題の背景として紀行家花袋が會遊の山水を巧みに配したのが花袋の初期の作品であつて、後年の作では田舎教師が最も初期の諸篇の味に近い。

九篇を比較するにロマンチックな興味が一作毎に平淡なものとなり野心的な作意が追々と清楚なものに進んで來てゐるのを看過出来ない。さうしてこれ等は皆重右衛門の最期を一頂點としてゐる。つまり重右衛門の最期が最も大がかりで自然主義的でありながら一面ロマンチックな趣も兼ね備へてゐる。名張少女になるともう野心的に大がかりなところはなくなつてその代りに抒情的なものである。この抒情趣味は後期の作品にもついて廻つたものである。この抒情味は所謂自然主義では排撃されたものであるが文學の一要素として甚だ人を魅するものに相違ない。さうして、思ふに花袋は生れながらの詩人であつたらう。この詩的魅力を自ら克服して、自己の轉生を期して努力したところに花袋の使命があつたものらしい。花袋は自己を改造するつもりで日本文學の傳統を破壊し、日本文學に國際的な一坑道を穿つた。

花袋に後年「少女病」の一作があつたが、初期の作品を見ると正しく、彼は少女愛好の作家である。

さまざまな少女を見本的に陳列したかの觀もある。この少女愛好の作家は一面でまた熱情的な煙霞行者である。行雲流水山川草木みなこれをよく觀、よく描いてゐる。さうして和歌と漢詩との造詣によつてこれを描破した彼は、この一點で期せずして日本文學の正統を傳へた作家であつた。筆者が拙作「田園の憂鬱」に對して過分な辭を與へて筆者を激勵された花袋の眞意を實は今、その初期の諸作を一讀して悟つた。花袋は關東地方の一田園と藝術的熱情とを描いた無名作家の一作を見て昔日の己を見るやうな感がなかつたであらうか。言は甚だ不遜になるが、筆者はこの集の花袋を見て自分が藝術上の家族を見る思ひがした。

これ等の諸作が書かれた時代を考へて見よう。紅露の勢力は既に強弩の末となり、鷗外は西陲の地にあつて殆んど文筆を斷つてゐた。中央文壇は中心勢力を失つて、二三の無名有爲の新作家が擡頭せんとしつゝある一方、文壇では新詩社の結社など詩的空氣が濃密を加へつつあつた。當時散文の世界で無名有爲とされた作家、例へば獨歩、さうして花袋などの作に詩的雰圍氣の多いのも亦この時代の反映ではあるまいか。加之、獨歩といひ、花袋といひ、みなその方に専心すれば一家を成すに足る詩人であつた。その詩的天分を在來の和歌俳句によつて表現することを欲しない詩的新精神が我國に新體詩を生んだ、しかもその新體詩に志を得なかつた青年が同一の文學精神を散文の世界に活かさうと試みたのが我が國の自然主義運動であるといふ筆者が獨斷は、抒情的であると同時に思索の一面を持つた(例へば憶

梅記に見るが如く)花袋の初期の作品や獨歩の諸作を見ると這般の消息が一層明になると信じてゐる期待がこの一書の通讀によつて更に自信の持てる意見となつたのを喜ぶ。

本書を読み得て筆者の最も感じたところは花袋の純眞な爲人と燃ゆるが如き藝術至上的の氣魄とである。諸作を見てその一時代先の作品である一事を忘れて甘いか幼稚だとかいふ事は今日何人も容易であらう。但、この醇乎として醇な氣質を持つた藝術家の烈々たる意氣が後年文藝史上の大事業となつた發展と、この至純な性のために甘さが尋常一様なものに終らずに人に訴へるところが美しく切ない所以を知らなければ與に文を談ずるに足りない。

僭越ながら再び筆者自身に即して云へば、筆者はこの一書を読んで近來とかく情氣を生じてゐた創作生活を何やら鼓舞されるものを多く感じて、一時代前のこの青年作家が現代の青年作家では到底してくれないこの貴重な鞭撻を自分に加へてさながら藝術的ホルモン注入の効果があつたやうなのを自ら覺える事實をここに記して置きたい。この現代の青年作家が能くせぬところを過去の青年作家が能くするといふ事は凡そ三つの事を自分に考へさせる。即ち自分の回顧癖のせるであるかも知れない。或は現代青年作家の無能に因るか、それとも花袋のこれ等の作品の出來榮とは必ずしも言はずその藝術に對する至誠の熱情の古人の域に達したのに因るか。その一に歸するよりも、その三者が合一したものであらうと思はれる。妄言多罪

昭和十二年八月十五日印刷
昭和十二年八月二十日發行

花袋全集 第十四卷
預約價金壹圓八拾錢



不許複製

著者

田山錄彌

發行者

東京市小石川區竹早町三十二番地
川俣馨一

印刷者

東京市豊島區巢鴨五丁目一〇八二番地
矢島勇三郎

東京市小石川區竹早町三十二番地

(内外書籍株式會社內)

發行所 花袋全集刊行會

電話小石川(86)一〇五四番
振替東京二八七九〇番

(刷印所刷印島矢)

15A 99

民國十二年八月二十日
 不帶...
 客... 行... 司...
 山... 公... 川...
 山... 公... 川...
 山... 公... 川...



